

計画・交通研究会

Association for Planning and Transportation Studies

会報 2012-11

発行日：平成24年11月11日

発行元：（社）計画・交通研究会

目次

Opinion1-2
いま改めて地球環境問題を

News Letters2-4
事業報告・活動報告

Backyard.....4
事務局通信

小野 武彦

清水建設(株)特別顧問
土木学会会長

□ Opinion

いま改めて地球環境問題を

東日本大震災から1年半が過ぎました。多くの方々が、被災地の復旧・復興の早期実現に向けて力を注がれている一方で、東北地方以外の人々から震災の記憶が消え、風化してしまわないか不安になる時があります。同じ様なことは、震災だけでなく、昨今の多発する自然災害の脅威を目の当たりにして、自然災害に対する意識が急激に高まると同時に、以前あれほど取り沙汰されていた地球環境問題が昨今話題に上ることが稀になったことにも云えるのではないのでしょうか。

そこで、改めて「地球環境問題」を考えてみます。一口に「地球環境問題」といっても、オゾン層の破壊、地球の温暖化、酸性雨、熱帯林の減少、砂漠化、開発途上国の公害、野生生物種の減少、海洋汚染、有害廃棄物の越境移動等多岐にわたる現象を指しますが、共通していることは、これらの現象が人間の長い社会活動に起因して今も進行していること、経済的側面を持ちながらその影響がグローバルな広がりを持っていることであります。このことは、地球温暖化問題をめぐる各国の対応の違いを見ても分かるように解決の難しさの要因となっています。先進国と開発途上国の対立に加え、先進国内部、途上国内部での利害対立等諸国間の利害が錯綜し、世界が未だに国益の調整に汲々としている間に、これらの問題が引き起こす自然環境への影響は広くそして速度を速めて進行しています。本来、地球環境の変化のスピードは一人の人間の時間尺度では捉えられないほど緩やかであるはずなのですが、北極海の海水の面積がこの10年余りで半減したり、多くの種が

次々と絶滅したりといった、今生きている我々の目前で急激な地球環境の変化が起きています。

諸説はありますが、人類が様々な活動で発生させた温室効果ガスが地球温暖化を促進し、気象変動の幅を増幅させているという考え方が大勢を占めつつあります。私も、地球という惑星の閉ざされた空間で保たれてきたデリケートな自然のバランスを人類が急激に崩す中、地球が新たな平衡を求めて変化のスピードを速めているような気がしてなりません。

地球環境問題を考えるなかで、我々が取り組むべき課題の重要なものの一つに「低炭素社会の実現」に向けた対策・施策の普及・展開があります。その中では、我々土木界が提案する方策をどうやって国民に受け入れてもらい具現化していくかが問題となっています。福島第一原子力発電所で起きた深刻な事故は、多くの国民に原子力が人類の制御能力を超えた存在である（言い換えると、人類は原子力を制御する能力を持ちえない）という意識を植え付けてしまい、その結果、原発の早期廃止を求める声が高まっています。しかし、言うまでもなくエネルギーの確保は家計から国家財政まで直結する極めて重要な事項であり、エネルギー政策の急激な変換は取り返しのつかない事態を国民生活に及ぼす可能性があります。グローバル化した世界の中で、一つの選択がどのような結果をもたらすかを見通すことは極めて困難なことです。従って、この問題について多面的な議論が必要であり、性急な結論を導くべきでないと考えます。エネルギーに関して国民が重大な選択を行うた

めには、再生エネルギーの比率を高めることを含めた様々な施策を展開する過程で起きることを、国民が身を持って学習する時間が必要だと思えます。そのために重要なことは、その施策に係わる分野の人たちが様々な立場で積極的に情報を発信することです。

翻って、我々土木分野に身を置く者も、巨大地震や異常気象に伴う災害へ備えるための社会資本整備の選択肢について国民に情報を適切かつ分かりやすく提供する責任を負っています。そのためには、産・学・官がしっかり連携することはもとより、他の科学分野の方々と積極的に連携することも必要です。さらには、事業計画立案、設計、施工のどの段階においても安

全・安心を追求する努力を一瞬たりとも怠ってはなりません。これらの点での不作為は“国土の安全”を担う土木技術者として、どのような立場にあっても許されるものではありません。その上で、我々は今までにも増して、国民のくらしの安全・安心の確保のために提供できることを積極的に開示し、我々の考えや行動に共感を得るための努力を惜しんではならないのです。

そして、我々は多くの関係者との共働の下、自らの技術を持って、温室効果ガスの削減にも、異常気象がもたらす災害から国民の命とくらしを守ることに貢献することができます。いま改めて土木技術者ひとり一人が土木の可能性を信じ、これからも力強く歩いていこうではありませんか。

□ News Letters

事業報告・活動報告 □

■2012年9月 計交研・当て塾共催セミナー (第XII講・第8回)

●日時：平成24年9月12日(水) 17:00～20:00

●場所：計画・交通研究会会議室

●講師・演題

①「当て塾」塾長 鈴木忠義 先生

Topics2：一国の生命線

②特定非営利活動法人 サヘルの森 小島通雅氏

砂漠化防止活動の25年

●参加者：17名（うち計交研関係5名）

〔講義概要〕

◆Topics2：一国の生命線（鈴木忠義）

前回（7月25日）のセミナーで紹介した葛西敬之氏の論考の続編について話題提供した。結論の賛否は別として、短い文章でありながら多くのことを明快に語った論考である。

◇葛西敬之（JR東海 会長）

「エネルギー政策 国益に背く『原発ゼロ』」

（2012.9.9 読賣新聞 朝刊 「地球を読む」）

※表題と以下の見出しは、鈴木による。

電力の必要性／現状の大衆迎合主義／リーダーの思想／歴史に学べ／求めているものの代償は何か／放射線への知識／2011年度3兆円の支出、電力25%値上／常にリスクと共存／

賠償責任の明確な区分／トータルコストは使用者か納税者に

◆現場主義×流れのプランニング

砂漠化防止活動の25年（小島通雅）

サヘルの森は西アフリカ・マリ共和国で植林の支援を25年続けてきたが、その進め方は一般的なプランニングの流れに沿ったものではない。

現場に入り、現場にいるからこそ得られる情報にもとづいて仕事の優先順位を決め、途中で種々の修正・補正を加えていくことを積み重ねて進んできた活動である。この〈現場主義×流れのプランニング〉という活動の実際について報告した。

〔報告目次〕

1. 活動の経緯
2. 現地（マリ）の状況
3. 活動の実際
4. その他

■2012年9月 計交研・当て塾共催セミナー (第XII講・第9回)

●日時：平成24年9月26日(水) 17:00～20:00

●場所：計画・交通研究会会議室

●講師・演題

①「当て塾」塾長 鈴木忠義 先生

日本の中山間地利用を考える (8)

②山梨大学名誉教授 花岡利幸 先生

交通発達の地域に及ぼす影響－山梨の事例

●参加者：25名（うち計交研関係8名）

〔講義概要〕

◆日本の中山間地利用を考える (8) (鈴木忠義)

川場村での東京農業大学オープンカレッジのテキストについて

中山間地の活性化のモデルとして30年間継続してきた「世田谷区と川場村の交流」事業を利用して、東京農業大学のオープンカレッジが2012年10月20・21日（土・日）に開催される。その時のテキストの構成案を解説した。

〔テキスト構成素案〕

1. 考え方：思想・発想・構想
2. 適地選択：川場の決定まで
3. 川場村の優れた産物：村民代表に聞く
4. 主要事業
 - (1) 校外学習
 - (2) 区民の自然体験と喜び
 - (3) 都市（世田谷）と山村（川場村）の交流
 - (4) 村民の参加
 - (5) 田園プラザ事業

◆交通発達の地域に及ぼす影響（花岡利幸）

山梨県、特に甲府盆地では、明治の近代化以降昭和40年頃まで甲府一極集中は変わらずにきたが、モータリゼーションによってその後の20年間に市街地は半径4kmに拡大し、都市的機能の甲府盆地への分散が起こった。

明治期の鉄道の開通、昭和57年の中央自動車道の開通、そして15年後のリニア中央新幹線の開通を山梨の三つの画期と捉えて、交通の発達が地域に及ぼす影響を考えた。

〔報告目次〕

1. 甲府盆地の道路整備
2. 三つの時代区分
3. 交通要衝の変化
4. リニア中央新幹線の山梨県へ及ぼす影響

■2012年10月 計交研・当て塾共催セミナー （第XII講・第10回）

●日時：平成24年10月10日（水）17:00～20:00

●場所：計画・交通研究会会議室

●講師・演題

①「当て塾」塾長 鈴木忠義 先生

日本の中山間地利用を考える (9)

②旅と観光研究室 溝口 周道 氏

「観光」の語の語源について

●参加者：13名（うち計交研関係4名）

〔講義概要〕

◆日本の中山間地利用を考える (9) (鈴木忠義)

－都市と山村の交流－

前回（9月26日）のセミナーで農大オープンカレッジ・テキストの目次案を解説したが、考え方の根本には“観光原論”の思考が存在する。そこで、考え方についてさらに詳しく説明する必要があると感じ、論述を続けることとした。

◇健康村の基本的考え方

- (1) 緒言－問題の所在
 - 1) 人間と社会
 - 2) 現代社会の背景と未来
- (2) 対応への考え方
 - 1) 思想（どのような価値感を持つか）
 - 2) 発想（人間の幸福と喜びの実現）
 - 3) 構想（企画－計画－実施－運営－評価）

計画の5要素：主体、目的、対象、手段、構成

◆「観光」の語の語源について（溝口周道）

現在使われている「観光」の語は、『易経』の「観国之光」から生まれたものとされているが、わが国で使われ始め広がり始めた経緯についてはこれまで示されていない。

以前の報告では、「観光」の語が使われてきた歴史的な流れを示したが、今回は、「観光」の語が使われ始めた背景と、用例の展開について報告した。

〔報告目次〕

1. 「観国之光」の解釈と中国における「観光」の用例／2. 江戸幕府による朱子学の奨励と儒教の経典の言葉への注目／3. 江戸時代における「観光」の使用例／4. 江戸時代より前に使われた「観光」の語／5. その他

■2012年10月 計交研・当て塾共催セミナー （第XII講・第11回）

●日時：平成24年10月24日（水）17:00～20:00

●場所：計画・交通研究会会議室

●講師・演題

①「当て塾」塾長 鈴木忠義 先生

Topics3：観光開発の実践記録

②宇都宮大学名誉教授 永井護 先生
近代化と観光

●参加者：14名（うち計交研関係5名）

〔講義概要〕

◆観光開発の実践（鈴木忠義）

36周年を迎えた季刊誌「観光文化」（公益財団法人 日本交通公社）が、215号から編集方針を刷新した。その中に日本の代表的温泉地「草津」の記事が掲載されていた。その記事では、戦後から現代に至る経緯がごく簡単に述べられていたため、下記の元草津町長の著書を用いて補足した。この本は、観光開発の参考になる稀に見る図書である。

〔参考図書〕荻原亮(元草津町長)「桔梗ヶ原の水先人－草津カントリークラブ生い立ちとその背景」(上毛新聞社、1996.9、四六版、229PP)

◆近代化と観光（永井 護）

これまで、私は、現場に近い実務に役立つ研

究や個別の学問分野・技術を観光に応用してきた。しかし、その中で、観光そのものについて十分に語ってこなかった。そう振り返ると、観光そのものをどのように認識したらよいのかと感じ、幾つかの興味ある文献から、観光の現状と将来について考えてみた。

〔報告目次〕

1. 日本の近代化とは
2. 21世紀の進む方向（国際化の中で）
3. ヨーロッパにおける近・現代観光のとらえ方
4. 日本における近代観光の視点（欧米との比較の視点） 経済と観光／政治と観光／社会・文化と観光／欧米からの伝播／観光の国際化
5. 仮のまとめ

キーワード；交換（誰と誰が、何を、どのような方式で）／観光史の必要性

（文責：「当て塾」事務局 野倉 淳）

□ Backyard

事務局通信 □

■会員状況

法人賛助会員として、新たに日本コンサルタンツ(株)様をご入会されました。

（社）計画・交通研究会

会長	森地	茂
副会長	石田	東生
副会長	家田	仁
副会長	屋井	鉄雄
事務局長	水野	高信
会報編集委員長	日比野	直彦

〒102-0083

東京都千代田区麹町5-2-1 K-WING 6F

TEL=03-3265-1774

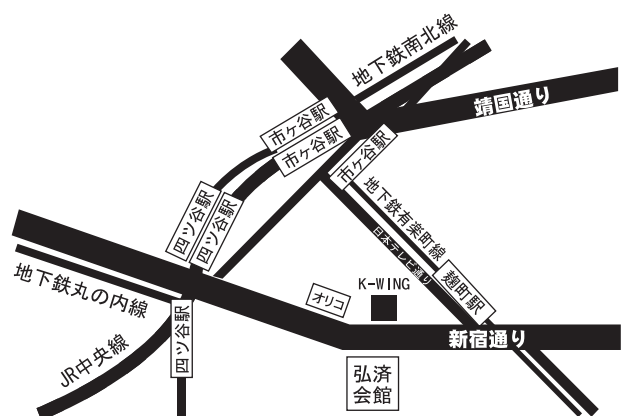
FAX=03-3221-5489

E-Mail=

jimukyoku@keikaku-kotsu.org

Homepage =

<http://www.keikaku-kotsu.org/>



（社）計画・交通研究会案内図

交通

JR中央線四谷駅麹町口から徒歩6分/地下鉄丸の内線四谷駅徒歩6分/南北線四谷駅徒歩7分/有楽町線麹町駅4番出口より4分

弘済会館前の大きなビル（オリコ）の右隣、1階にドラッグストア（クスリ）の入った小さなビル。